

## 治療の副作用を乗り越えて

—テ・テ・アウンさんの多剤耐性結核との闘い—

(ティン・ミ・ミ・カイン医師の聞き取りによる)

私はヤンゴンのラインタウンシップに住む30歳の女性です。2年ほど前、夫とともに仕事を求めて行っていたタイ国境にあるタチレックという町から帰ってきたばかりの頃、私は両方の胸の奥のあたりに痛みを覚えました。まだ下の娘が小さかった頃、結核菌は見つかりませんでしたが、胸部X線検査で異常が見つかり、結核の治療を6カ月受けたことがあります。その治療は無事終了し、私は元気になってタチレックに行っていたのです。タチレックでは薬剤耐性結核で治療を受けていた近所の女性が私のところにやって来て話をすることがありましたが、そのことが少し心配でした。私の家族には結核患者はいないので、おそらくその彼女から感染したのではないかと考えています。

具合の悪い私を見て、夫はラインタウンシップにあるヘルスセンターに私を連れて行き、そこからさらに紹介されて、アウンサン病院に行くことになりました。そこで多剤耐性結核と診断されたのです。当時二人目の娘はまだ生後8カ月でした。もし私が治療を受けなければ、娘に感染してしまうのではないかと心配でたまりませんでした。そう考えると悲しくて、ただただ私は泣くことしかできませんでした。優しい夫は、「治療を受けるしか他に方法はないだろう」と言って私を励ましてくれ、ようやく私は治療を受けることを決心し、母乳を止め、娘たちを自分から遠ざけることにしました。

私の治療担当は、助産師のエイ・カイ・カインさんです(写真左)。彼女は毎日私の家を訪問し、私を気遣ってくれました。しかしながら、2カ月经つと注射と飲み薬による治療の副作用のために、もう治療を止めたくなくなりました。私は怒りやすくなり、近くの人声に



左 助産師のエイ・カイ・カインさん、右 筆者

イライラするようになりました。下の子の声すらそうなのですから、上の娘たちのことに注意を向けることも煩わしくなるほどでした。子供のお弁当を準備するときも疲れて気が進みませんでした。そのため夫が家事を代わってくれ、子供たちは祖父母と一緒に寝ることになりました。

この時期、悪い考えが何度も頭に浮かんで来て、いつそのこと治療を止めて死んでしまいたいと考えようになりました。なぜか両方のお尻のあたりがとても痛み、まるで水の入った袋の上に座っているような感覚もありました。ベルのなるような音が聞こえること、イライラしてしまうこと、そして、何よりも子供の世話ができないことが私の最大の苦痛でした。もし私が死ねば、子供たちは母を失ってしまう。そう思って、自分の考えを変えようと必死に努力しました。

人から長い治療のことについて尋ねられると、今でも思い出して苦しくなり、直ぐに泣き出してしまいました。当時は食欲もなく、口にするものと言えればバナナだけでした。子供たちと別々の部屋で寝ることも私を悲しませました。子供たちもじっと私の方を遠くから見つめ、母親の愛情と触れ合いを求めていることが分かるからです。

そんな時、幸運にも私はある老夫婦に出会いました。その夫は自分と同じ多剤耐性結核の治療を受けた経験があり、しかも糖尿病を患っていたのです。彼らは2つの病気と闘った経験をもとに、どうすれば治療終了に向けて取り組むことができるのかを話してくれました。彼らの話は私を元気づけました。ある学校教師は、私がアウンサン病院に行くときにはわざわざ付き添ってくれました。それまでは夫が仕事を休んで私を病院まで連れて行ってくれていたのです。

20カ月にも及ぶ長い治療が終わったとき、私たちは共に喜びました。今、私は十分に子供たちと夫の世話がすることに喜びを感じています。毎朝、子供たちを学校に連れて行っています。子供たちと同じベッドで寝ることもできます。結核治療で苦しむ人々を見た時には、皆が私にしてくれたように、私も彼らに声をかけ励ましてあげたいと思っています。🍀

(訳：国際部長 岡田耕輔)